

# Contribution

## 信用リスク管理におけるデータ品質の罣!



株式会社NTTデータ 第一金融事業本部  
課長代理 川口 敏樹



株式会社リアライズ  
代表取締役社長 大西 浩史

信用リスク計算において本当に信頼できるデータが使われていますか?市場も商品も複雑化する中で、正確な取引情報を抜け漏れなく集め、効率的にリスク計算するためには、自社のデータ資産を管理する「データマネジメント」を実現することが必須施策となってきております。

### 1. 信用リスク管理におけるデータマネジメントの重要性

2007年3月期末から導入されたBaselⅢは、①最低所要自己資本比率、②金融機関の自己管理と監督上の検証、③市場規律という3本柱から成り立っています。特に第二の柱においては、各金融機関が自発的にリスク管理の高度化に取り組み、健全性の維持・向上を図ることが求められています。金融業務が多様化し、金融商品の複雑化が進む中で、リスク管理に対して今まで以上に広範囲かつ深掘した対策が不可欠となっております。

信用リスクは、取引データを多くのグループ会社や関連部署から集め本社勘定系ホストや市場系ホストにおいて加工し、格付情報等の外部リファレンスデータを付加した上で、複雑な計算を経て算出されます。多くの金融機関において、各プロセスにおける業務体制及びシステム構築を実施していることと思われます。ところが、高度な仕組みを導入したにも関わらず、取引情報のデータそのものが不正確で、抜け漏れを含み、最新のデータが揃っていないとしたら、実質的には信用リスク管理を実施できていることにはなりません。また、個々のグループ企業内では適切に管理されているデータも、グループ全体で収集して管理、活用しようとする、管理方法の違いやフォーマットの違い等に阻害され、無駄な作業や調整に時間とコストがかかる場合があります。具体的には以下のような、データにまつわる問題が発生している可能性があります。

#### 【信用リスク管理に関わるデータの問題例】

- ◆各支店から収集した取引データの内、取引先コードが振られていないものはシステムに投入できないため、信用リスク計算の算出対象から除外してしまっている。その結果、リスクを過少もしくは過大に評価している。
- ◆取引先名称について、同じ会社にも関わらず表記がバラバラでシステムに登録されているため、当該企業と期中にどれだけの取引が発生したのか正確に把握できない。
- ◆取引データの新規登録や更新といったデータ運用管理が未定義であるため、四半期決算の都度信用リスク計算のために必要なデータを探し集め、修正するといった膨大な作業が発生し、担当者に大きな負荷がかかっている。

上記はいずれもデータにまつわる問題であり、「データリスク」と呼べるものです。こうした問題には、データマネジメントのアプローチで解決を図る必要があります。データマネジメントは、まず己を知ることから始まります。そこで、自社のデータリスクについて簡単にセルフチェックしてみましょう。

### 2. データリスクに関するセルフチェック

以下に挙げる質問で、自社の取引データに潜むデータリスクについてセルフチェックをしてみてください。質問の観点は、データの状態と使い方という2つです。

#### ◆データの状態

**【質問①:データの正確性】**自社で取り扱う取引先名称や銘柄名称に、揺れやばらつき、入力ミスはありませんか? (揺れのある取引先データ/入力ミスの例: (株)リアライズ/Realize Corp/リヤライズ)

上記例のようなデータが混在すると、正確な取引先と取引量が把握できず、結果として信用リスク計算の算出値の信頼性が損なわれるリスクが発生します。

**【質問②:データの網羅性】**信用リスク計算の算出に必要なデータが全て入力されていますか? (問題例:顧客コードが全顧客に振られておらず、システムに取り込めないデータが存在する)

信用リスク計算において全取引データが投入されないことにより、自社のリスクを過少或いは過大に評価してしまうリスクが発生します。

**【質問③：データの最新性】**取引先名称について合併前の旧名称をいまだに使用していませんか？（問題データの例：三和銀行/インドネシア石油）

合併前の取引先名称を使用して取引データが生成されていると、その取引が期中に本当に成立したのか、過去のデータが紛れ込んだのか即時に把握することが困難です。

**【質問④：データの関係性】**自社のデータを参照した際に、債券発行体の親子関係をすぐに把握できますか？

債券の発行体の親子関係が関連付けられていない場合、取引先をグループ全体として見た場合のデフォルト確率(PD)、デフォルト時損失率(LGD)、エクスポージャー(EAD)等を正確に把握できない可能性があります。

#### ◆データの使い方

**【質問⑤：データの入力時】**新規に発生した取引先の情報を正確に、抜け漏れなく登録する手順やルールが整備されていますか？

入力する担当者によって“株式会社”もしくは“(株)”と入力するのといった不統一な形式が混在すると、システム上は同じ会社を別会社として認識するため、デフォルト時の損失の大きさを見誤ることになります

**【質問⑥：データの集約時】**四半期決算において、必要なデータの収集に半月以上かかっていませんか？

データの収集に時間がかかることは、決算の都度必要なデータを探し出して、間違いが発見されれば補正して品質を担保するといった運用が行われていることが予想され、担当者に大きな負担がかかっていることになります。

**【質問⑦：データの加工時】**本来システム間で自動連携すべき処理について、システム間の仕様連携がとれていないために人的オペレーションや簡易ツールを挟んで暫定対処していませんか？

個別最適は実現できているが全体最適が実現できておらず、システム間連携においてフォーマット変換/データ加工の簡易ツールや人的オペレーションがツギハギされており、ワンストップの効率的な処理が実現できない場合があります。

**【質問⑧：データの管理者】**これらの質問について、自社内で検討しているメンバはいますか？またリスク計算のパラメータとなるソースデータのオーナーシップは確立していますか？

データリスクへの対応や品質維持を実現するためにはデータマネジメントに関して検討体制が必要です。自社内のデータは資産であり、資産の管理には管理責任者の存在が必須となります。

さていかがでしたか？

そもそもこれらの質問に対する答えが浮かばないとすると、信用リスク計算の算出値の信頼性が低い可能性、算出にあたって無駄な時間とコストがかかるといった問題やリスクが潜んでいると考えられます。また、どれか1つでも未対応な事項があれば、金融庁報告において指摘される可能性があります。事実、過去の『金融検査指摘事例集』には、算定プロセスの問題点のみならず、データの正確性欠如やデータマネジメント体制の不備に関する指摘が記載されています。

### 3. データの品質を高める対応策案

データリスクが存在するという懸念がある場合、まずはそのリスクの範囲と度合いを把握することが第一です。そのためには、全体最適の観点から複数の業務/システムの流れを、蓄積されるデータを、様々な観点で検証することが必要になります。検証の結果に基づき、以下に挙げる対応策の中から必要なソリューションを実施します。

- ◆**データ観点** \*データクレンジング/名寄せ \*グループ統一顧客/商品コード体系定義 \*データモデリング
- ◆**業務/管理観点** \*データマネジメント業務定義 \*データマネジメント体制構築支援とデータマネジメント教育
- ◆**システム観点** \*取引先マスタ/商品マスタ整備 \*フロント部門マスタと本社マスタのコンバージョンツール導入

自社を流れるデータは、「血液」と同じです。血液をさらさらな状態に保つことが健康上重要であることと同様に、データを健全な状態に整備し、品質とガバナンスを維持することが重要です。

### 4. リアライズ社によるソリューション

リアライズでは、データマネジメントソリューションについて、データメンテナンスからデータ活用までのトータルプロセスにおいてサービス提供を行っております。また、NTTデータと連携し、データの活用を考慮しお客様のニーズに合致したシステム構築を支援しております。リアライズは長年データマネジメントを専門としており、ノウハウや各種ツールといった専門性を保有し、ツールだけでなく目検プロセスも導入することで高品質なデータ整備を実現します。また、データは物品と同様、日々の業務の中で使えば使うほど汚れていくものです。中・長期的な視点でデータ品質を管理する方針やルールの策定も合わせて実施します。

BIS規制は数年ごとに強化と緩和の振幅を繰り返していますが、データの品質管理とガバナンスは規制の強弱に関わらず自社のリスク管理において重要な施策です。問題データの影響は、対応が遅れば遅れるほど肥大化します。リアライズのデータマネジメントソリューションを活用することで、高度な信用リスク管理を実現することを提案します。

